

『満漢並香集』 訳注 (三) *

荒木 典子

はじめに

前号に引き続き、『西廂時藝 雅趣蔵書』の満文訳『満漢並香集』訳注第三章に入る。本章は、金聖嘆批評『西廂記』一之三（『満文西廂記』では第三章）「酬韻」の一文“隔牆兒酬和到天明”（塀越しに夜明けまで詩の応答をする）に基づいた八股文形式の文に満文訳を付したものである。本文の前には七言詩が見える。

『西廂記』「酬韻」の概略は以下の通りである。

紅娘は鶯鶯に、張生に再び会い、自己紹介されたことを話す。二人は夜に、寺の花園に祭壇をしつらえ、焼香する。塀越しに様子を伺っていた張生は詩を吟じ、二人に聞かせる。

月色溶溶夜，花陰寂寂春，如何臨皓魄，不見月中人
鶯鶯も即座に詩を作り答える。

蘭闥深寂寞，無記度芳春，料得高吟者，應憐長嘆人
張生は応答の速やかなこと、詩のできばえがすばらしいことを喜び、夜明けまで詩のやりとりを続けたいと願うが、奥様に叱られるという紅娘に促され、鶯鶯は部屋に戻ってしまう。張生は月明かりの下、澄んだ空気の中で一人取り残され、いつの日か彼女と夫婦になりたいと思う。

【凡例】

- ① 満文各行の左端の数字は順に、葉数、表裏、行数を表す。葉数は書かれていないので一巻ごとに筆者が数えたものを記す。
- ② 3行1セットで、上から満文、日本語訳、漢文の順に記す。日本語訳は満文の逐語訳としたためやや生硬である。

- ③ 転写の方法はメルレンドルフ式に必要な修正を加えたものである¹。
- ④ 『繡像西廂時藝』(『時藝』)は早稲田大学図書館蔵本を参照した。本書には挾批も見られるが異同調査の対象外とする。
- ⑤ 適宜『満漢西廂記』も参照した。テキストは京都大学人文科学研究所蔵、康熙四十九年序刊本(上記「東方学デジタル図書館」で閲覧)に拠る。

転写と訳注・第一冊(第三章)

- 20a1 bing hiyang ji bithe >
 並香集
 並香集
- 20a2 ilaci fiyelen >
 第三章
 第三章
- 20a3 mudan de acabuha
 韻に酬いる
 酬韻
- 20a4 golmin sejileme šumin dorolome jing jerguwen de nikefi²
 長く嘆息し深くお辞儀し ちょうど欄干にもたれて
 長吁深拜正徘徊
- 20a5 bisire de edun-i hūsun de ferguwecuke ši šan-i
 いるところに風の力で素晴らしい詩が耳の
 風送高吟入耳来
- 20a6 jakade gaitai isinjiha >> fulgiyan abdaha eyere mukei
 そばに突然至った 紅い葉は 流れる水に
 紅葉不須流水寄
- 20a7 ildun de jasire be joo > fu dabali acabume irgebuhe
 乗じて便りを送らなくてよい 塀越しに調和して吟じた
 隔牆酬和即良媒

- 20b1 gisun utuhai sain jala inu >>
言葉が すなわち良い仲人だ
- 21a1 fu dabali geretele acabume irgebuki³ >
塀ごしに夜通し相和して詩歌を作って欲しい
隔牆兒酬和到天明
- 21a2 goidame acabume irgebuki seme buyelengge > haji halhūn-i
長いこと相和して詩歌を作りたいと 慈しみ温かく
願酬和之久者 羹墻⁴之慕
- 21a3 kidure gūnin hing sehe >> acabume irgebure dabala > geretele
思う心は篤実だ 相和して詩を作るのだ 夜明けまで
切矣 夫酬和也 而
- 21a4 okini seci giyan nio >> damu fu giyalaha turgun bifi >
そうしたいという道理か ただ塀を隔てた理由があり
到天明乎哉 維隔牆之故
- 21a5 jang gung umainaci ojarahū teni ere arga be
張公はしかたなくようやくこの計略を
張乃為此不得已之計耳
- 21a6 deribuhe >> tuwaci > julgeci ebsi juwe gūnin-i
始めた 見れば いにしえより二つの心の
且⁵ 從來 兩情之相違
- 21a7 ishunde jurcerengge (o:jurcarengge) abka secibe > juwe gūnin-i ishunde
お互いに異なるということを天が言ったとしても 二つの心のお
互いに
者 天也 而兩情之相合
- 21b1 acarangge > inu abuka >> abka juwa gūnin be ishunde
合うというのもまた天だ 天は二つの心をお互いに
者 亦天 天能使兩情之相合
- 21b2 acara de isibume mutembime > geli siheleme bahafi

- 引き合わせるに及ぶことができ また阻止することもでき
而又限之以不得合
- 21b3 acarakū de isibuci > abka > niyalma be akaburengge
引き合わせないことに及ぶなら 天が人をいじめること
不幾疑天之厄人甚乎
- 21b4 dabanahabi seme elei kenehunjerakū semeo > udu tuttu
甚だしいといよいよ疑わないことはあるまい たとえそうだと
- 21b5 seme sukdun-i baire > jilgan-i acabure de > abkai
しても 気が求め 声が合わせるので 天が
氣求聲應 已邀
- 21b6 buhe salgabun aifini aliha be dahame > inu damu
与えた縁すでに受けたのだから また、ただ
天假之縁 亦惟期東
- 21b7 dergi hošo-i gerenere be ereme > ere dobori-i sebjen be
東方の空が明るいのを望み この夜の楽しみを
方之既白 以永今夕歡斯已
- 22a1 dosobuci waraha secina >> bi te-i acabume irgebure
永らえさせたならば掬い出したと言いたい 私は今の相和して詩
を作った
矣 吾得為今茲之酬和思之
- 22a2 niyalma-i jalin bodoki >> terei bolgo jilgan sula weihuken
人のために思いたい その清らかな声ゆるやかに軽く
方其清音嚶嚶
- 22a3 ojoro fonde utuhai biyai fejile ing gasha guwendere
なる時にたちまち月の下でウグイスが鳴く
恍如月下聞鶯⁶
- 22a4 adali seme donjimbihe hergen be teisulebume > gisiun be
ように聞こえた 文字を合わせて 言葉を
而字斟句酌

- 22a5 toktobume > urgunjehei⁷ de mudan be gaifi dahame
ちりばめて喜んでいるので韻を取って従って
不禁取原韻而奉酬也
- 22a6 acabuha ci ebsi saikan mujilen ferguwecuke mujilen umai
相和してから 美しい心 非凡な心は少しも
芳心頓作錦心
- 22a7 cingkai acu sehe ke akū oho terei ashaha gu
全く異なるという時はなくなる その帯びている玉の
當其環珮珊
- 22b1 kalang killing seme fonde elei ilha-i cala enduri
からんころんという時、ほとんど花の向こうの仙
珊 幾疑花外仙來
- 22b2 niyalma jihe gese seme kenehunjembihe mudan be hūwaliyambume
人が来たようだと 疑った 韻を合わせ
而韻和律叶
- 22b3 lioi be acabume > urgunjehei ice ši be tucibufi
律を合わせ 喜びながら新しい詩を出し
不禁出新詩而相合也
- 22b4 ishunde irgebuhe ci amasi > hiyan-i angga fujuruse
お互いに詩を作ったあとで芳しい口、上品な
香口⁸兼成繡口⁹
- 22b5 annga uthai urehe banjija adali johō > ere erin de
口はたちまち瓜二つのように動き始めた この時に
斯時也
- 22b6 ere deribure > tere acaburengge > damu fu dabali acabume
こちらが作りあちらで相和すこと ただ塀ごしに相和して
此唱彼和 不過隔牆而酬和耳
- 22b7 irgebure dabala > getuken-i niyelere > tomorhon-i hūlarangge
詩を作るに過ぎない はっきりと書を読み明瞭に誦すること
朗誦高吟

- 23a1 inu damu dartai andande acabume irgebure dabala > gelhun
またただたちまちのうちに相和して詩を作るのみ ずうずう
亦祇酬和於片時耳 敢
- 23a2 akū sirenci banjiname > jilgan be hūwaliyambume > geredene
しくも長吟すればできあがり 声を合わせ夜が明けるまで
曰依永¹⁰和聲 直到
- 23a3 okini seme henduci ombio >> udu tuttu sehe seme
やりたいといえばできるか たと言ったとしても
天明乎哉 雖然
- 23a4 efujehe fu de tefi > fu guwan be hargašaha babe tuwaci >
壊した塀に座り 復関を望み見た所以を見れば
乘彼埭垣 以望復關¹¹
- 23a5 yargiyan-i hargašahai mujilen efujehengge bi >> te gisun
本当に望んでいる 心が傷ついている 今、ことごと
固有望之而心傷者 今雖色
- 23a6 cira udu acara unde bicibe > mudan lioi ishunde
顔色がたとえまだ調和していないとしても 韻律互いに
笑未親 而音律相接
- 23a7 hūwaliyaka be dahame > aisin gu obufi goro mujilen
調和したので 金玉として 遠い心を
寧致賦金玉之遐心¹²
- 23b1 jafambi seme irgeburengge > tere ainaha seme akū
献上するという詩を作る それはとにかくない
- 23b2 baita >> dergi adaki de hojo bifi > fu be dabafi
ことだ 東隣に美人がいて 塀を越えて
東隣巧笑¹³ 踰而從
- 23b3 dahaha babe kimcici > inu dahaha mangggi gūnin
従ったことを明らかにすればまた従ったので心の
亦有從之而快意¹⁴者

- 23b4 selahangge bi >> te boco fiyan udu sabure unde bicibe >
喜びがある 今 容貌をたとえまだ見ていないとしても
今雖芝顔¹⁵未近
- 23b5 uculehei irgebuhei gūnin šumin oho be dahame >
歌う、詩を詠むことばが深いのに従って
而歌咏情深
- 23b6 dobori geretele hairame narašambi seme jaburengge > inu
夜が明けるまでいとおしむと答える また
又何妨竟夜之流連
- 23b7 heo seme ojoro weile >> damu biya tucifi eldeke ucuri >
よどみなく行う罪 ただ月が出て光輝いた時
特是月出皎兮
- 24a1 uhuken beye dembei sungeljere de > sunjaci ging ni
柔らかな姿がたいそう揺れるので 五更の
而柔姿競秀 羅衣豈耐五
- 24a2 edun lo-i etuku ainahai etere seme jobombi >> ede
風に羅の服は どうして逆らって苦しむ ここで
更風也
- 24a3 aikabade bi acabuki sembime > si irgeburakū oci >
もし私が相和したいと言って あなたが詩を作らないなら
假 我欲酬焉 爾無和焉
- 24a4 gerendere ging foriha seme hono jondoro gūnin akū
夜が明け初め初更を打ったとなお心配する考えはない
遑¹⁶曰曉鐘初動乎
- 24a5 bade > geli fu bifi giyalabuha be ai hendure >> tuttu
のにまた塀があつて隔てられているのをなんと言ふ しかし
而況有牆以為之隔也 然而
- 24a6 seme si mini emgi mujilen aifini ishunde gūlika >>
ながらあなたと私は既に心がお互いに意気投合した
爾與我 已心相契矣

- 24a7 unenggi si ilan usiha sabumbi sere gisun be tucibufi
本当にあなたは三星をみると言う言葉をあらわして
果 爾也賦三星之篇
- 24b1 irgebume > bi fujurunga yangsangga jui sere gisun be
詩を作り私は上品で美しい子と言う言葉を
我也咏窈窕之章
- 24b2 tucibufi gingsime > fu-i jakarame oksome mudan de
あらわして口ずさみ 塀に沿って一歩ずつ歩き韻に
循牆步韻
- 24b3 acabure oci > gubci mederi dorgi de acabuha sain
相和していたら全ての海の中で相和した良い
宇宙惟我二人默默賡同調也
- 24b4 sehengge damu meni juwe niyalma-i teile mutehe be
言ったことはただ我々二人だけができる
- 24b5 dahame > udu durgiya usiha dekdehe seme > gelhun akū
のだからたとえ明けの明星が上ってもずうずうしくも
則雖明星有爛 而敢問
- 24b6 dobori ai erin oho seme fonjimbio >> sabdaha silenggi
夜のいつになったと問うのか 滴り落ちた露が
夜之何其¹⁷乎 抑零露團兮
- 24b7 giltaršara erin > yadalinggū beye labdu ceceršere de >
光を放つ時 か弱い体がひどく震えるので
而弱姿多芳
- 25a1 šahurun omo-i hanci ilhaga wase usihrahū seme
冷たい池の近く 彩りゆたかな靴下に水がしみないかと
寒潭恐濕凌波襪¹⁸也
- 25a2 gelembi >> ede aikabade bi irgebumbime > si acabure be
恐れる ここでもし私が詩を作っても あなたが相和すことを
假 我欲和焉 爾無酬焉

- 25a3 sarkū oci > coko hūlaha seme hono jondoro gūnin
知らないなら鶏が時を告げてもなお心配する考えは
遑曰曉雞已唱乎
- 25a4 akū bade > geli fu bifi giyalabuha be ai hendure >>
ないのに また塀があって隔てられているのをなんと言う
而況有牆以為隔也
- 25a5 tuttu seme bi sini emgi gūnin aifini ishunde
そうはいつでも私とあなたは一緒にすでにお互いに
然而 我與爾 已志相通矣
- 25a6 hafunaha >> unenggi si bi aliyaki > cuwan-i niyalma
通じ合った 本当にはあなたは、私は待ちたい 船の人は
果 爾也歌印¹⁹須於舟子²⁰
- 25a7 ainambi sere gisun be tucibufi uculeme > bi saikan
何をしているという言葉であらわして歌い 私は美しい
我也賦
- 25b1 niyalma bi > wergi hošo de sere gisun be tucibufi niyalma >
人がいる、西の方に、と言う言葉を表したら 人
美人於西方
- 25b2 fu-i ishun ilifi mudan be kimcire oci > abka na
塀に向かって立ち韻を詳らかにすれば 天地の
面牆審音 天壤²¹間
- 25b3 sidende irgebuhe mangga sehengge > damu meni juwe niyalma-i
間で詩を作った立派なものである ただ我々二人
惟我兩人寂寂稱雅奏也
- 25b4 teile mutehe be dahame > udu erde šun fosotolao
だけができるのだから たとえ夜明けの太陽が昇った
則雖曙色將啟
- 25b5 seme > gelhun akū dobori absi golmin ni seme gūnimbio >>
としてもずうずうしくも夜はなんと長いなあと思うのか

而敢卜夜於方永乎

- 25b6 uttu ofi abka geretele acabume irgebure be buyembi >>
だから空が明るくなるまで相和し詩を作ることを大切にする
此所以願酬和到天明也
- 25b7 ainaci abkai fejergi-i mujilen urgunjere baita > amba muru
どうして天の下の心が楽しむこと およそ
天下賞心之處
- 26a1 erin-i bilaci ojarahū tuttu emgeri uculeme
時の期限を決めて止まず ゆえに一回歌い
不限於時 故 一唱三嘆
- 26a2 ilanggeri cibsire de > juwe saikan-i ishunde ucaraha
三回嘆くので 二つの美しさのお互いに出会った
既幸兩美之相遭
- 26a3 jalin urgunje manggi > geli juwe gūnin-i wacihiyame
ので喜んだ直後に また二つの心のすべて
尤幸兩情之畢達
- 26a4 tucinjihe jailn urgunjembi >> utttu oci tugi-i siden be
現れたので 楽しむ そうであるならば雲の間を
則 瞻望雲衢²²
- 26a5 hargašame tuwahaī > dergi de udu ulden uldeke seme >
望んでみている 東にたとえ曙光が出ても
即東有啟明
- 26a6 hono sunja ging golmin akū seme hairambi >> muse
なお五更が長くないのを惜しむ 我々
猶惜五夜之未長耳 吾
- 26a7 niyalmai gūnin acabuha weile > anba muru gisun de
の心相和したこと およそ言葉に
人得意之境 大都 形之於
- 26b1 tucikebi >> tuttu icangga-i uculere > nilukan-i
出した ゆえに大喜びで唱和して 優雅に

- 言 故 恬吟蜜咏²³
- 26b2 irgebure de > erdemu takabure be ombi sere anggala >
詩を作るので才能を認めさせることができるだけではない
非為見才之地
- 26b3 yargiyan-i mujilen be tucibure gisun ombi >> uttu
本当に心をあらわす言葉ができる このようで
實為寫心之語 則
- 26b4 oci fucihi sy de šan waliyafi donjihai > koko hūlame
あるなら菩薩の寺で聞き耳を立てて聞いている 鶏が時を告げ
側耳蕭寺²⁴ 即東方
- 26b5 dergi hošo udu gereke seme > hono alin jakarakangge
東の方角 たとえ明るくなくてもなお山が明るみ始めるのが
明矣 猶恨達旦²⁵之甚短
- 26b6 jaci hūdun seme korsombi >> fu dabali iliha niyalma >
とても早いと恨む 塀越しに立った人
耳 隔牆人
- 26b7 ulhisungge seme gūnime ulhisungge be hairaci mutembio >
聡明な人と思って 聡明な人を愛惜することが
能使惺惺惜惺惺否耶
- 27a1 akūn >>
できるか
- 27a2 seibeni fon-i baita weile be gūnime > mujilen
昔の 時のことを考えて 心
摹當時情事
- 27a3 den balai gūninjara gisun banjibure de > dolo ulhisu
高くみだりに考える言葉を生んだので内心心得た
心妄想語 靈思妙緒
- 27a4 gūnin yebcungge ofi > gala be dahame emke emken-i
心が麗しいならば 手に従って ひとつひとつ
觸手紛披

- 27a5 yooni arame tucibuhebi >> tere menggun-i dengjan be
ことごとく作ってあらわした その銀の燭台に
 覺銀缸斜背
- 27a6 cashūlame ilifi > heni tucire > jendu hūlara gisun
背を向けて立ちほんの少し出してひそかに読む言葉
 小語低聲之句
- 27a7 udu yebcungge bicibe > hono ereci eberi gese >>
たとえ美しくあってもなおこれより及ばざることし
 猶減此風流

[注釈]

*本研究は JSPS 科研費 JP19K00578 の助成を受けたものです。

- ¹ 早田輝洋・寺村政男(2004)『大清全書 本文編』:7 を参考にした。
- ² jerguwen de niki: この 3 語は上から墨が塗られ見え消しのようにになっている。すぐ左には tathūnjame (徘徊する) と書き込みがあり、漢文に合うように訂正しようとした人物がいたようだ。そもそもなぜこの漢文に対し jerguwen de niki という満文を当てたのだろうか。『満漢西廂記』第三章で“倚蘭長嘆也”を jerguwen niki golmin sejilere ba bini (欄干にもたれて長く嘆息している) (巻一、27a-6) と訳しているのを参考にしたのではないか。
- ³ fu dabali geretele acabume irgebuki: 満文本 (京都大学蔵康熙 49 年序刊本、他) も同じ。
- ⁴ 羹牆: 人を仰ぎ慕うこと。『後漢書』李固伝に“昔堯殂之後、舜仰慕三年、坐則見堯於牆、食則覩堯於羹”(かつて堯が崩御してから、舜は三年間敬慕し、座れば壁に、食事の時には羹に堯を思い浮かべた)とある。
- ⁵ 且: 文頭に置かれて話を切り出す発語のことばであろう。満文訳に tuwaci (見れば) と当てられており、白話小説で同様な働きをする“但見”，“只見”を連想させるが関連性は不明。なお、『金瓶梅』における人物や情景を描写する韻文を引き出す“但見”を『満文金瓶梅』にて tuwaci とする例が見られる。
- ⁶ 恍如月下聞鶯: 『西廂記』「酬韻」に“你小名兒真不枉喚做鶯鶯”(あなたの幼名が鶯鶯というだけのこととはある)とある。
- ⁷ urgunjehei: 22b3 にも同様な構造で用いられる。urgunjemi は「喜ぶ」の意味。漢語“不禁”と対応させている理由は待考。

- 8 香口：女性の口の美称。
- 9 繡口：文章が美しいこと。
- 10 依永：声の高さや抑揚を歌に合わせて変化させること。この“永”は“詠”に通じるが、満文は「永きに依りて」と解釈したのだろうか。
- 11 乘彼塤垣,以望復關：「彼の塤垣(崩れた垣根)に乗りて以って復関を望む」『詩経』国風・衛風「氓」の一節。女性が、恋人のいる復関の方角をのぞみ見ている様子(高田(1966:241))。
- 12 寧致賦金玉之遐心：『詩経』小雅「白駒」に“毋金玉爾音而有遐心”(爾の音を金玉とし遐心有ることなかれ)という一節がある。賢者が白い馬に乗ってやってきたので、少しでも長く我が家にいてほしいと思っていたが、とうとう去っていった。高田(1968:111)では「せめて金玉にも値する音信を、時々は寄せて下さい。我々を疎遠にしてしまつて、音沙汰無しに遠くはなれてしまうことをして下さるな」と解釈する。
- 13 巧笑：美しい笑顔。
- 14 快意：心にかなう。
- 15 芝顔：手紙の相手の容貌に対する尊称。
- 16 惶：“惶”(恐れる)に通じる。
- 17 夜之何其：“夜何其”は「夜のいつか」の意味。『詩経』小雅「庭燎」に“夜如何其 夜未央”(夜はもう何時になったであろうかと問われる。夜はまだ真夜中を過ぎてはいない)(高田(1968:100))とある。
- 18 凌波襪：美女の靴下。三国・魏・曹植「洛神賦」に“凌波微步,羅襪生塵”(波を踏むような軽やかな歩み、羅の靴下の下から塵が舞う)とある。
- 19 印：第一人称。「わたし」「われ」。
- 20 舟子：船頭。
- 21 天壤：天と地。
- 22 雲衢：雲の中の道。
- 23 恬吟蜜咏：通常“恬吟密咏”とする。心安らかに吟詠すること。
- 24 蕭寺：寺。唐・李肇『唐國史補』に“梁武帝造寺,令蕭子雲飛白大書蕭字,至今一蕭字存焉,後因稱為蕭寺。”(梁の武帝・蕭衍が寺を造営した時に、蕭子雲に姓の「蕭」を大書させた。今でも「蕭」の字はまだあるので、後に蕭寺と呼ぶようになった)とある。
- 25 達旦：夜明けまで。

参考文献

- 荒木典子(2018) 『『満漢並香集』訳注(一)』、『人文学報』第514号(第12分冊):21-40。
- 荒木典子(2019) 『『満漢並香集』訳注(二)』、『人文学報』第515号(第12分冊):21-40。

人文学報第 516 号 (第 12 分冊)

冊):21-32。

高田眞治・編(1966)『漢詩大系 1 詩経』上巻、集英社。

高田眞治・編(1968)『漢詩大系 2 詩経』下巻、集英社。

寺村政男、荒木典子、鋤田智彦(2012)「『満漢合璧西廂記』の総合的な研究
その 3」、『水門』第 24 号:左 1-27。

宮原民平(1921)『国訳漢文大成文学部 9 西廂記・琵琶記』国民文庫刊行
会。